少年の日の思い出 (3)

（二年たち「ぼく」が大きな少年になったころ、「ぼく」は、隣の子ども・エーミールが、※ヤママユガを手に入れたといううわさを聞きました。「ぼく」は自分の本で、このチョウのさし絵を何度も眺めていました。）

エーミールがこの不思議なチョウを持っているということを聞くと、ぼくはすっかり興奮してしまって、それが見られるときの来るのが待ちきれなくなった。食後、外出ができるようになると、すぐぼくは中庭を越えて、隣の家の四階にのぼっていった。そこに例の先生のむすこは、小さいながら自分だけのへやを持っていた。それがぼくにはどのくらいうらやましかったかわからない。途中でぼくは、だれにも会わなかった。上にたどりついて、へやの戸をノックしたが、返事がなかった。エーミールはいなかったのだ。ドアのハンドルをまわしてみると、入口はあいていることがあった。

せめて例のチョウを見たいと、ぼくは中にはいった。そしてすぐに、エーミールが、収集をしまっている二つの大きな箱を手に取った。どちらの箱にも見つからなかったが、やがて、そのチョウはまだ展翅板にのっているかもしれないと思いついた。はたしてそこにあった。トビ色のビロードの羽を細長い紙きれにはりのばされて、ヤママユガは展翅板にとめられていた。ぼくはその上にかがんで、毛のはえた赤茶色の触角や、優雅で、はてしなく微妙な色をした羽のふちや、下羽の内がわのふちにある細い羊毛のような毛などを残らず、間近からながめた。あいにくあの有名な斑点だけは見られなかった。細長い紙きれの下になっていたのだ。

胸をどきどきさせながら、ぼくは①誘惑にまけて、紙きれを取りのけ、ピンをぬいた。すると、②四つの大きな不思議な斑点が、さし絵のよりはずっと美しく、ずっとすばらしく、ぼくを見つめた。それを見ると、この宝を手にいれたいという逆らいがたい欲望を感じて、ぼくは生れてはじめて盗みをおかした。ぼくは針をそっと引っぱった。チョウはもう乾いていたので、形はくずれなかった。③ぼくはそれを手のひらにのせて、エーミールのへやから持ちだした。そのときさしずめぼくは、大きな満足感のほか何も感じていなかった。

チョウを右手にかくして、ぼくは階段をおりた。そのときだ。④下のほうからだれかぼくの方にあがってくるのが聞えた。その瞬間にぼくの良心は目ざめた。ぼくは突然、自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟った。同時に見つかりはしないか、という恐ろしい不安におそわれて、ぼくは本能的に、獲物をかくしていた手を、上着のポケットに突っこんだ。ゆっくりとぼくは歩きつづけたが、大それた恥ずべきことをしたという、つめたい気持ちにふるえていた。

（高橋健二訳『ヘッセ全集2　車輪の下』新潮社　所収
「少年の日の思い出」による）

※ヤママユガ…ここではクジャクヤママユのこととされる。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「誘惑」とあるが、この内容を正しく述べたものを選びなさい。

ア 誰もいないエーミールの部屋に、勝手にはいりたい。
イ 展翅のための紙切れやピンを勝手に取り、斑点を見たい。
ウ ヤママユガを勝手に持ち帰り、自分のものにしたい。

〔　　〕

(2) ――線②「四つの大きな……ぼくを見つめた」とあるが、ここで用いられている表現技法を選びなさい。

ア 体言止め　イ 倒置　ウ 直喩　エ 擬人法

〔　　〕

(3) ――線③「ぼくはそれを……へやから持ちだした」とあるが、このときの「ぼく」の心情として適当なものを選びなさい。

ア エーミールに対するうらやましさ。
イ ヤママユガを手に入れたことへの満足感。
ウ 恥ずべきことをしたことへのつめたい気持ち。

〔　　〕

(4) ――線④「下のほうから……聞えた」とあるが、この後の「ぼく」の心情の変化を説明した文となるように、解答欄に当てはまる言葉を本文中から指定の字数に合うように探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし、句読点も字数に含む。

(A 十五字) という事実に気づき、誰かに (B 十九字) を感じた。

A 〔　　　〕～〔　　　〕
B 〔　　　〕～〔　　　〕